

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284033

研究課題名(和文) 日本近代演劇デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイヴ

研究課題名(英文) Modern Japanese Theatre Oral History Archive

研究代表者

日比野 啓 (HIBINO, KEI)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：40302830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円

研究成果の概要(和文)：主として商業演劇に携わった三十五人の演劇人・評論家・研究者に聞き書きを行った。一回の聞き書きに費やした時間は二時間から四時間で、聞き書きとして記録に残された文字数はそれぞれ二万字から五万字にのぼる。その後、研究協力者による編集・再構成を経て、研究代表者・研究分担者による歴史史料との付き合い合わせとイントロダクション執筆、最後に当事者チェックをしていただき、その一部はウェブサイト・日本近代演劇デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイブに公開された。こうした聞き書きを積み重ねてきた結果、商業演劇を中心に人間関係のネットワークが築かれていき、日本近代演劇全体に通底する美学が構築されたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We have interviewed as many as 35 theatre practitioners, critics, and researchers who were mainly involved in Japanese commercial theatre. On average, an interview took two to four hours and its transcription is 20,000 to 40,000 2-byte character long. After the research collaborators edited and revised the interviews, and the principal Investigator as well as co-investigators checked and the interviewees approved them, we published them on our site, Japanese Modern Theatre Digital Oral History Archive (<http://oraltheatrehistory.org>). As a result, we demonstrated that a human network has been built around commercial theatre, not shingeki or angura theatre, which has contributed to creating common sensibilities that are shared by practitioners in all genres of Japanese theatre.

研究分野：演劇学

キーワード：オーラル・ヒストリー 聞き書き 商業演劇 新国劇 新派 ミュージカル

1. 研究開始当初の背景

(1) 演劇・芸能関係者への聞き書きは、『演藝画報』など演劇一般誌において明治期から行われてきており、現在でも(膨大な数にのぼる古典芸能関係者へのものを除いても)商業出版として成立しているものは相当数ある。とはいえ、その対象は有名俳優・演者やスター演出家が殆どであり、内容も個人史に焦点が当てられることが多かった。こうした人々のあやふやで不正確な記憶を「貴重な証言」として「拝聴」し、記録することが従来の聞き書きであり、個々の証言が演劇史をどのように書き換えるか、という演劇研究の観点からの問題意識はあまり反映されることがなかった。また、(2) そもそもこうした聞き書きの対象となる近現代日本の商業演劇は、歌舞伎をのぞいては演劇学の研究対象にならないことが多く、一九七〇年代頃より欧米の演劇研究で商業演劇の重要性が指摘され、研究の裾野が広がっていったことと比べると数十年の遅れがあった。さらに(3) 近年人文学のさまざまな分野において導入されてきたオーラル・ヒストリーは、「当事者の語りを通して、多様な考えが絡み合う歴史の厚みを明らかにするもの」(「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」)であるという認識のもと、取材者が「介入」することを極力忌避する風潮があった。

2. 研究の目的

本研究では、(1) 対象を広げて、脇役・端役が多かった俳優、照明や衣装といった裏方のなかでも注目されることのなかった職掌に携わっていた人々、さらに現場と深く関わっていた研究者にもインタビューを行い、(2) 研究分担者の一人である神山彰が提唱する「中間領域の演劇」という概念にもとづき、新国劇・新派・喜劇・ミュージカルといった、歌舞伎と新劇(のちに小劇場演劇)の中間に属していた商業演劇に注目する。そして商業演劇とそれ以外のジャンルの間での人的交流によって、現在の新劇や小劇場が興行や上演の慣習だけでなく、その美学までもが商業演劇の影響を受けてきたことを明らかにする。さらに(3) 本来オーラル・ヒストリーとは、取材者と被取材者とが自らの立場の相違に固執せず、胸襟を開いて対話することで、記憶の主観性・歴史の重層性という限界を乗り越え、過去の事実についての解釈を共同で構築していく作業である、という前提のもと、演劇史において通説とされてきた事実や、他の被取材者から得られた情報を被取材者に提供し、対話を行うことで、取材者も被取材者も思いもよらなかった「発見」をして、従来の解釈に拠らない新たな視座の獲得することを目的とする。

その上で、(4) ウェブサイトにその記録をアップロードすることで、キーワードによる検索やクロスリファレンスのためのリンク作成が容易になるというハイパーテクス

トの利点を最大限生かしたウェブサイト構築を行い、申請者たちのみならずそのサイトを訪れたビジターにとっても、ジャンルの垣根を超えた人的交流が可視化されようになりたい。

3. 研究の方法

商業演劇に何らかのかたちで関わってきた俳優・劇作家・演出家・裏方・研究者にインタビューし、これまで文字史料として残りにくかった、昭和戦前期から現在に至るまでの商業演劇(「歌手演劇」だけではなく、新派・新国劇や、宝塚・松竹歌劇団・OSK 歌劇団などレヴューを含めたもの)・新劇・小劇場演劇における人的交流を明らかにし、従来別々に語られてきたジャンルごとの歴史を、日本近代演劇史という統合的観点から語り直すための史料整備を行う。インタビューの内容を文字起こしし、ウェブサイトでデジタル・アーカイヴとして公開することによって、その成果を広く国民・社会に発信するとともに、ハイパーテキストとしての特色を最大限生かし、これまで目に見えにくかった事実間の関連性を明示する。

4. 研究成果

以下の三十五人の演劇人・評論家・研究者に聞き書きを行った(五十音順・敬称略)

芦屋小雁(俳優)・安部寧(音楽評論家)・井上誠(元東京キッドブラザース)・薄井憲二(舞踊史研究家・舞踊評論家・元東勇作バレエ団団員)・大月隆寛(民俗学者・元早稲田興行主宰)・甲斐京子(元SKD)・加納幸和(俳優・劇作家・演出家・劇団花組芝居主宰)・川和孝(演出家)・菊池明(早稲田大学演劇博物館招聘研究員)・熊倉一雄(俳優・演出家)・小石新八(舞台美術家・武蔵野美術大学名誉教授)・小島慶四郎(俳優・松竹新喜劇)・坂本博士(声楽家・サカモト・ミュージカル・カンパニー主宰)・佐藤信(劇作家・演出家)・三代目渋谷天外(俳優・演出家・松竹新喜劇)・関矢幸雄(振付家・演出家)・宝田明(俳優)・田中林輔(元新国劇演出)・檀上茂(吉本新喜劇座付作家)・寺崎嘉浩(裕則、演出家)・所治海(衣装家・舞台美術家)・中村哮夫(演出家)・中山マリ(俳優・元ザ・スーパー・カムパニー)・日高仁(演出家・日劇レヴュー演出・構成)・左とん平(俳優)・福田逸(演出家・翻訳家・明治大学商学部教授)・福田善之(劇作家・演出家)・藤木孝(俳優)・星野和彦(演出家)・巻上公一(元東京キッドブラザース)・丸山博一(俳優・東宝現代劇)・守美雄(元東京新聞記者・かたばみ座制作者)・柳田豊(俳優・劇団新派)・横澤祐一(俳優・劇作家・東宝現代劇)・米田亘(松竹新喜劇文芸部)

一回の聞き書きに費やした時間は二時間から四時間で、聞き書きとして記録に残された

文字数はそれぞれ二万字から五万字にのぼった。

その後、研究協力者による編集・再構成を経て、研究代表者・研究分担者による歴史史料との付き合わせとイントロダクション執筆、最後に当事者チェックをしていただき、その一部はウェブサイト・日本近代演劇デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイブ (<http://oraltheatrehistory.org>) に公開された。

こうした聞き書きを積み重ねてきた結果、本研究は、オーラル・ヒストリーの手法を導入することで日本近代演劇史を書き換える一例を示したといえる。

具体的には、(1) ジャンルごとに縦割りに記述されてきた日本近代演劇史において、ジャンル間を移動する(観客を含めた)人材に着目し、そうした人々に聞き書き取材を行うことで、ジャンルを超えた上演慣行・美学が育まれてきたことを示すことができた。

また、人的交流のハブとして機能してきたのは、一公演あたりの予算規模が新劇やアングラ・小劇場演劇に比べ大きかった商業演劇であり、(2) 商業演劇を中心に人間関係のネットワークが築かれていき、日本近代演劇全体に通底する美学が構築されたことを明らかにした。

さらにこれは(3) 日本近代演劇史における商業演劇の意義の再考という新たな視点を獲得することにつながった。新劇、歌舞伎、文楽、能狂言、アングラ・小劇場演劇という美学的に確立したジャンルに比べると、新派、新国劇、喜劇(松竹新喜劇や吉本新喜劇など)、歌手演劇、狭義の商業演劇(東宝現代劇など)、ミュージカルなどからなる商業演劇は従来「芸術的ではない」という理由で軽視されてきた。だが一つの作品に費やされる才能と金額という観点から考えると、商業演劇は新劇や歌舞伎、文楽に比べ芸術的に洗練されていない、と断じるのは難しい。むしろ、新劇や歌舞伎、文楽においてはその美学を積極的に論じ、その価値を擁護した実演家、批評家や研究者が数多くいたのに対し、商業演劇の担い手や観客は自らが作り上げ楽しんできたものを言語化しようとしなかった、という違いが評価の差を生んだと考えるほうが自然だろう。

けれども従来の演劇研究と同様、新聞や雑誌などに掲載された劇評、プレスリリースや公演パンフレットなどに記された当事者たちの発言、劇作家や演出家、批評家たちが発表した宣言といった、文字に残る記録のみに依拠するのであれば、商業演劇の意義を認めることは難しい。聞き書きを実施し、当事者が語る「事実」を書籍・文献等で得られる史実と照合することで、当時の作り手や観客が商業演劇の作品に独自の美的価値を見出し、個々の作品を判断するにあたって独自の美的基準を当てはめ、得られた評価をごく狭い「内輪」で交換することで(文字史料に残ら

ないかたちで)美的価値・美的基準を確固としたものにしていったことがはじめて明らかになった。

こうした研究成果は、下記に掲げる発表論文等に明らかであるが、とりわけ 2016 年度日本演劇学会全国大会におけるパネルセッション「聞き書きとデジタル・アーカイブ」において、日本近代演劇デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイブの意義について広く学会における議論を促したこと、また国際学会・国際シンポジウムに研究代表者・分担者が計五件参加して、日本近現代演劇研究におけるオーラル・ヒストリーの重要性について国際的な認知を求めたことは特筆すべきことかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

井上優

「獅子文六(岩田豊雄)における身体 『青春怪談』(1954)に見る不安定な性」『西洋比較演劇研究』17 巻 1 号、2018 年 3 月

神山彰

「演劇は何故マイナーなジャンルになったのか」『日本演劇学会紀要 演劇学論集』65 号、2017 年 11 月

神山彰

「思い出で歌舞伎を語る時代の終り」『歌舞伎 研究と批評』58 号、2017 年 4 月

神山彰

「かつて文学をどう読んだか」『明治大学文学部紀要 文芸研究』132 号、2017 年 3 月

神山彰

「娯楽としての演劇とその変容」『近代日本』空間下の東アジア大衆演劇(立教大学アジア地域研究所) 1 号、2017 年 3 月

井上優

「今日、戯曲を読むとは?」『明治大学文学部紀要 文芸研究』132 号、2017 年 3 月

神山彰

「昭和五十年代の国立劇場 最後の記憶共有時代」『歌舞伎 研究と批評』57 号、2016 年 9 月

井上優

「演劇が現在形であることは忘却と戦いつるか」『シアターアーツ』59 号、2016 年 4 月

神山彰

「市村鶴蔵の思い出」『歌舞伎 研究と批評』56 号、2016 年 3 月

神山彰

「八十助時代の十世三津五郎」『歌舞伎 研究と批評』54 号、2015 年 7 月

神山彰

「歌舞伎の戦後七十年」『歌舞伎 研究と批評』53 号、2015 年 3 月

神山彰

「安井昌二を悼む」、『歌舞伎 研究と批評』、52号、2014年9月

〔学会発表〕(計11件)

井上優

「獅子文六(岩田豊雄)における身体 『青春怪談』(1954)に見る不安定な性」、『日本演劇学会分科会・西洋比較演劇研究会』、2017年10月21日、成城大学

日比野啓

“What was Shōchiku Shingeki? The Lost Tradition of a Japanese Theatre,” The 17th annual conference of The Association for Asian Performance, 2017年8月3日、Planet Hollywood Resort & Casino, Las Vegas (アメリカ合衆国)

神山彰

「演劇はなぜマイナーなジャンルになったのか」、『日本演劇学会2017年度全国大会』、2017年6月4日、愛媛大学

神山彰、中野正昭、他

「娯楽としての演劇とその変容」、『立教大学アジア地域研究所主催国際シンポジウム「近代日本」空間下の東アジア大衆演劇』、2017年1月8日、立教大学

神山彰

「国立劇場の半世紀」、『歌舞伎学会』、2016年12月10日、二松学舎大学

井上優、他

「二か国語パネルセッション 世界はまだ舞台か? シェイクスピア劇と日本の高等教育」、『日本演劇学会2016年度研究集会』、2016年12月4日、京都産業大学

中野正昭

「従表演方法切入「女優」的近代定位 以帝劇女演員森律子為研究對象」、『東亞大衆戲劇國際學術研討會2016』、2016年10月8日、国立台北芸術大学国際会議庁(台湾)

日比野啓、神山彰、児玉竜一、小田中章浩

「聞き書きとデジタル・アーカイブ」、『日本演劇学会全国大会』、2016年7月2日、大阪大学

中野正昭

「ある学生エキストラからみた築地小劇場新資料「水盛源一郎『小説 築地小劇場 築地の人々』」をもとに」、『日本演劇学会2016年度全国大会』、2016年7月2日、大阪大学

竹本幹夫、日置貴之、井上優、山田高誌

「シンポジウム 古典演劇・伝統演劇の復元的上演はどこまで可能か」、『日本演劇学会秋の研究集会』、2015年10月24日、法政大学市ヶ谷キャンパス

中野正昭

「帝国劇場女優劇 女優の登場にみる日本の近代演劇の形成」、『国際シンポジウム「跨越時空的歌聲舞影」2014 女性戲劇研討會2014 International Conference of Female

Drama-2014』、2014年11月16日、国立台南成功大学(台湾)

〔図書〕(計11件)

日比野啓、神山彰、中野正昭、他

『戦後ミュージカルの展開』森話社、2017年

日比野啓、神山彰、他

『演劇のジャポニスム』森話社、2017年

Jonah Salz、中野正昭、他

A History of Japanese Theatre, Cambridge University Press, 2016.

杉山千鶴、中野正昭、他

『浅草オペラ 舞台芸術と娯楽の近代』森話社、2017年

大笹吉雄、岡室美奈子、日比野啓、神山彰、中野正昭、他

『日本戯曲大事典』白水社、2016年

神山彰、他

『交差する歌舞伎と新劇』森話社、2016年

日比野啓、神山彰、中野正昭、他

『ステージ・ショウの時代』森話社、2015年

神山彰、井上優、佐藤正紀、他

『演劇の課題2』、三恵社、2015年

井上優、他

『シェイクスピアと日本』、風間書房、2015年

神山彰、他

『忘れられた演劇』森話社、2014年

日比野啓、神山彰、中野正昭、他

『商業演劇の光芒』森話社、2014年

〔その他〕

ホームページ等

日本近代演劇デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイブ

<http://oraltheatrehistory.org>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日比野啓 (HIBINO, KEI)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号: 40302830

(2) 研究分担者

神山彰 (KAMIYAMA, Akira)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号: 20287882

井上優 (INOUE, Masaru)

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号: 20406797

中野正昭 (NAKANO, Masaaki)

明治大学・文学部・兼任講師

研究者番号: 40409727

(3) 連携研究者

該当せず

(4)研究協力者(五十音順)

大原薫(OHARA, Kaoru)

演劇編集者・ライター

川添史子(KAWAZOE, Fumiko)

演劇編集者・ライター

鈴木理映子(SUZUKI, Rieko)

元青山学院大学非常勤講師・演劇編集者・ラ

イター

舘野太朗(TACHINO, Taro)

元大阪市立大学都市文化研究センター研究

員・民俗芸能学会理事

袴田京二(HAKAMADA, Kyoji)

演劇編集者・ライター

和田尚久(WADA, Naohisa)

放送作家・文筆家